ヨハネによる福音書 12 章 20－26 節

「新 5 千円札」

過越しの祭りの時、何人かのギリシャ人が「イエスに会いたい」と伝えてきました。フィリポがアンデレに伝え、そしてそのことがイエスさまに伝わります。ギリシャ人に対してのイエスさまの答えが、23節と24節でした。イエスさまはここで旧約聖書の言葉を一切用いず、あえて自然の法則を用いて語られました。聞いてきた相手がギリシャ人であったからこそ、彼らが理解しやすいものを用いて答えたのです。それが、この一粒の麦のたとえでした。これは一般的な真理として語られただけでなく、ご自分について語られたのです。また、その後の言葉を見ると、これがご弟子たちへの勧めとして、あるいは、覚悟として語られたことがわかります。一粒の麦は、そのまま食べてしまえばそれだけのことです。しかし、もしこれを地中に蒔けば一粒の麦としては食べられなくなってしまいますが、その麦から芽が出て、やがて多くの実を成らせることになります。それと同じように、イエスさまが地上の王、政治的な救い主として、この地上のいのちを用いるのであれば、そこにいる人々が一時的に良い生活をすることができるかもしれませんが、それまでのことです。しかし、十字架に掛かって死なれるのなら、多くの人々を救うことになります。イエスさまご自身が、一粒の麦として死ぬことが、主なる神様の御心であることを、誰よりもはっきりと知っておられました。そして最後に 26 節を、人々にイエスさまは伝えます。

一粒では終わらずに今も伝え続けられるキリスト教。その役割を果たしたのは多くの、「遣わされた者」たちのおかげでした。イエス・キリストによって遣わされた者たちは、まさにこの一粒の麦となって地に落ちてくだいました。今日は「遣わされた者」として日本人の女性を一人紹介したいと思います。それが、津田梅子さんです。新 5 千円札の顔として、今年の 7 月から出回っています。

津田梅子は、1871 年日本最初の女子留学生の岩倉使節団の一人として、アメリカに渡りました。そしてアメリカで受洗し、約 11 年のアメリカ生活を終えて帰国します。けれどカルチャーショックを受け、改めて夢のためにアメリカへ留学。そして帰国後、1900 年「女子英学塾（現津田塾大学）」を創設します。この時、資金面でも、精神面でも、そして信仰面でも、多くの支えがあったのです。梅子の生涯は常に志と決断と実行がありました。

晩年、梅子が病床でつづった言葉があります。それは、「この永遠の世界の中で、自分や私の仕事はどんなに小さいものか自覚しなければならない。一粒の麦は砕かれた地に落ち、新たな草木が生えるということを…。」これこそが、今日の与えられた聖書箇所がもと

になっている言葉です。梅子の心の中心にあったのは、自らが犠牲になってでも、先陣を切って後に続く人たちの道を備えることだったのです。あたかも神さまに選ばれた自分の使命を確認する覚悟をも感じさせる言葉です。

昔の宣教は、まさに命がけでした。自分を犠牲にして、自分の命を犠牲にしてまで日本を愛し、日本人のために生涯をささげられました。そうした一粒の麦によって、多くの実を結ぶことができたのです。これは宣教師だけのことではありません。私たちも同じなのです。私たちは職場や家庭、学校や人付き合いの少ない中へ、時には遣わされることでしょう。遣わされる先は、自分が進みたちと思っている場所と違うかもしれません。神さまがそこへと遣わされたのであれば、必ずあなたしかそこで行えない使命が用意されているはずです。苦しいこと、悲しいこともあるかもしれません。けれども、主なる神様がおられ、そして、主イエスが共におられる。この聖なる交わりの中に、私たちを招いてくださるために、主は、一粒の麦となって死んでくださいました。それほどまでに、神は私たちを愛してくださいました。私たちも、主イエスという、一粒の麦によって、生かされた者です。そうであるなら、周りの人たちの救いのために、小さな実を結ぶことを、願う生き方へと、導かれてまいりたいと思うのです。主の聖霊によって、主イエスの価値観と考え方をもって、与えられた人生を全うさせていただきたいと思うのです。